

6. 「わたしは、あなたをエジプトの国、奴隷の家から連れ出した、あなたの神、主である。
7. あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があってはならない。
8. あなたは、自分のために、偶像を造ってはならない。上の天にあるものでも、下の地にあるものでも、地の下の水の中にあるものでも、どんな形をも造ってはならない。
9. それらを拝んではならない。それらに仕えてはならない。あなたの神、主であるわたしは、ねたむ神、わたしを憎む者には、父の咎を子に報い、三代、四代にまで及ぼし、
10. わたしを愛し、わたしの命令を守る者には、恵みを千代にまで施すからである。
11. あなたは、あなたの神、主の御名を、みだりに唱えてはならない。主は、御名をみだりに唱える者を、罰せずにはおかない。
12. 安息日を守って、これを聖なる日とせよ。あなたの神、主が命じられたとおりに。
13. 六日間、働いて、あなたのすべての仕事をしなければならない。
14. しかし七日目は、あなたの神、主の安息である。あなたはどんな仕事もしてはならない。——あなたも、あなたの息子、娘も、あなたの男奴隷や女奴隷も、あなたの牛、ろばも、あなたのどんな家畜も、またあなたの町囲みのうちにいる在留異国人も。——そうすれば、あなたの男奴隷も、女奴隷も、あなたと同じように休むことができる。
15. あなたは、自分がエジプトの地で奴隷であったこと、そして、あなたの神、主が力強い御手と伸べられた腕とをもって、あなたをそこから連れ出されたことを覚えていなければならない。それゆえ、あなたの神、主は、安息日を守るよう、あなたに命じられたのである。
16. あなたの父と母を敬え。あなたの神、主が命じられたとおりに。それは、あなたの年齢が長くなるため、また、あなたの神、主が与えようとしておられる地で、しあわせになるためである。
17. 殺してはならない。
18. 姦淫してはならない。
19. 盗んではならない。
20. あなたの隣人に対し、偽証してはならない。
21. あなたの隣人の妻を欲しがってはならない。あなたの隣人の家、畑、男奴隷、女奴隷、牛、ろば、すべてあなたの隣人のものを、欲しがってはならない。」

説教

十戒は、神が人間に期待するみこころの全体であり、同時に社会生活に於ける倫理規範の全体です。神に愛されこの世に造られた人間が、神の愛に応じて神と人を愛する、それが十戒です。前半の五つの戒めが「神を愛する戒め」で、後半五つの戒めは「人を愛する戒め」です。

まず、神はイスラエルを愛して、恵みを与えたことを最初に伝えます。「わたしは、あなたをエジプトの国、奴隷の家から連れ出した、あなたの神、主である。」(6) 神はどんなに御自分の民を愛されたことでしょうか。それは、奴隷というどん底の人生から救い出したという事実を表されています。決定的な救いをもたらしてください

ました。この方以外には救い主はありません。この方以外に神はなく、このお方こそ神です。この方は、世界を創造し、人間を造りました。そして、神に造ってもらいながらも神に背く罪人を、見捨てることなく憐れんで、罪と滅びから救い出してくださったのです。こうして神は人を愛されました。そして、神は、ご自身の愛に応えて、人も神を愛するよう求めます。

その最初の戒めは、「あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があってはならない」です。これは何より最も大切な戒めです。当然と言えば当然のことですが、イスラエルの民を造り、滅びから救い出してくださったのは、イスラエルの神、主だけです。この方以外に神はありません。ですから、「あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があってはならない」のです。「わたしのほかに」の直訳は「わたしの顔の前に」で、神が直接見ているその目の前で浮気をして、神以外のものを神とすることを禁じるという、何とも生々しい表現です。

神以外のものを神とせず、神だけを神とするとはどういうことでしょうか。それは神だけを「拝み」、神だけに「仕える」ことを意味します。それで続く第二戒で、神は「あなたは、自分のために、偶像を造ってはならない」と命じます(8)。神は見えません。私たちは生きて神を見ることはできません。それで、「上の天にあるもの」、「下の地にあるもの」、「地の下の水の中にあるもの」といった、要するに、被造物を創造主なる神に見立てて「偶像」を造ります。そして、その自分の造った「偶像」を「拝み」、それに「仕える」のです。しかし、金銀宝石をちりばめてどんなに立派に造っても、それはあくまで神ではありません。神ならぬ「偶像」に過ぎません。それで、そんなものを「造ってはならない」、「拝んではならない」、さらにはそれに「仕えてはならない」と神は命じます(8-9)。そして、その理由を「あなたの神、主であるわたしは、ねたむ神」だから、というのでした。

「ねたむ」のは、一途にその人を愛しているからです。愛していない相手が浮気しても、私たちは何とも思いません。毎日のように芸能人の浮気話をマスコミが報じますが、別に何とも思いません。愛しているから「ねたむ」のです。神はただ一途に人を愛しているのです、人が浮気をする「ねたむ」のです。そして、「父の咎を子に報い、三代、四代にまで及ぼし」ます。その一方で、「わたしを愛し、わたしの命令を守る者には、恵みを千代にまで施す」と約束なさるのです。そうして、「三代、四代」と呪いを下しながら、神の愛に応えて生きるようにしてください。神を愛し、神の命令を守って、千代に及ぶ恵みを楽しむようにしてください。

生けるまことの唯一の神を知った者は、どう生きるでしょうか。真に神を知った者に起こる最大の変化は何でしょうか。それは主の御名をみだりに唱えなくなるということです。それで、第三番目の戒めとして「あなたは、あなたの神、主の御名を、みだりに唱えてはならない。主は、御名をみだりに唱える者を、罰せずにはおかない。」と教えられます(11)。「みだりに」の直訳は「空しく、意味なく」です。神を知らぬ者は、意味なく主の御名を口にしますが、神を知るとそうはいかなくなります。むしろ、この私を愛してこの世に造り、罪と滅びから救い出してくださった神の憐れみを知って、主の御名をさがめます。神を信じるとは、こういうことです。神を知るとは、こういうことなのです。本当に神を知れば、神をさがめます。主の御名を尊びます。耳だけ、目だけ、あるいは頭や口先だけの信仰というものは、本来あり得ません。礼拝を伴わぬ信仰というものは無いのです。

神のことは礼拝の中で聞かれます。讚美の中で神はご自身を顕します。主の御名を尊ぶ、それが信仰です。主の御名を尊び、畏れ、主に感謝して、主の教えに聞き従う、それが神を信じる本物の信仰なのです。このことは一生に一度だけそうならばいいというものではありません。いつも確認しなければならないことです。それで、週に一度集まって神を礼拝するよう教えられます。それが第四戒です。「安息日を守って、これを聖なる日とせよ。」(12) この日には、子どもたちのみならず、奴隷や家畜に至るまでその仕事を完全に休ませて、神を礼拝します。シナイ山で十戒を授けられた時のことを記録する出エジプト記では、神が天地を造られたことを思い出すために、安息日を聖別するよう命じられました(出エジプト 20:10-11)。ここでは、神がエジプトでの悲惨な奴隷生活から救い

出してくださったことを思い出すために安息日を守れと命じられます(申 5:13-15)。両者を総合すると、週に一度の安息日は、神が自分をこの世に造ってくださったことと、罪と滅びから救い出してくださったことを思い出すための日なのです。神の民は、週に一度はこの世の喧騒を逃れ、神に造られ、罪から救われた自分の原点を思い出しては、憐れみ深い神をほめたたえるのです。

神を愛する最後の戒めは「あなたの父と母を敬え」です。神の次にお世話になった大切な恩人として、親を敬います。神は見えませんが、親は見えます。神になり代わって自分を養ってくれた親に、心から感謝して敬います。そして、そうすると、神の祝福が伴います。出エジプト記では「長生きする」ことだけが約束されましたが(出 20:12)、ここでは「長生き」に加えて、「幸せになる」祝福が約束されます(申 5:16)。神は、子どもを教育する権能を親と教会に委ねました。子どもは、親を通して神の愛と正義を学び、幸せに長生きする神の祝福を受けるのです。

ここまでの五つの戒めが、神の愛に応じて神を愛する具体的なあり方です。

以下、人を愛する戒めとなります。

人を愛する戒めの最初、第六番目の戒めは「殺してはならない」です。神は、人を愛し、この世に造り、日ごとの糧を与え、のみならず、御子の身代わりの血をもって罪と滅びから救い出して、今日この通り生かしてくださっています。人の命は神のもので、人は神に生かされています。キリストが身代わりになるほど、私たちのためなら御自分のいのちを犠牲にしても惜しくないほど、私たちは神に愛され、生かされているのです。だから、殺してなりません。神が生かしている命を人が「殺してはならない」のです。むしろ、神が生かしておられるように、生かすべきです。神に敵対する悪魔は、人殺しで、人の命を食いものにしますが、神の愛を知る神の民は、神に愛され生かされている恵みに感謝して、人を生かすよう努めます。神が生かしておられるように、というより、神が自分を愛して生かしてくださっているように、そのように自分も人を愛して生かすのです。

七番目の戒めは「姦淫してはならない」です。神が定めた婚姻という聖なる絆を破壊するあらゆる関係を禁じるものです。不倫はもとより、婚前交渉、同性愛、近親相姦などがこれに当たります。神が人を造られた時、神は人に伴侶を与えて、家庭を造られました。人は、家庭を通して、愛され、生かされるのです。家庭は、命を生み出し、生かす源泉です。悪魔は今も生きて働いてこれを破壊していますが、神は一途に人を愛して今日も生かしてくださっています。神の愛を知る神の民は、その愛に応じて、姦淫せず、神に愛されているように伴侶を愛します。

八番目の戒めは「盗んではならない」です。自他の物を区別しなければなりません。墮落した人間は根っからの泥棒です。人の物のみならず神のものまで盗みます。最初の間人は、人としての分際をわきまえず、不遜にも神になろうとしてさばかれました。神と人の権利を侵害せず、むしろ神と人に帰すべき正当な権利をきちんと認めて、確保し、さらにはそれを向上させねばなりません。神の愛を知る神の民は、相手の所有と権利を積極的に認めて、相手に返すべき尊厳と尊敬と栄光とを積極的に帰すよう努めます。十分の一のささげ物を神にささげます。どうすれば自分が得をするかと盗むことばかり考えず、貰うことばかり考えないで、よく働き、よく稼いで、神と人ともに気前よく施すのです。

第九の戒めは「あなたの隣人に対し、偽証してはならない」です。「偽りの父」悪魔は、人を偽りで惑わして、殺します。最初の間アダムとエヴァは、悪魔に欺かれて、呪われ、死ぬようになりました。悪魔は偽りをもって人を殺すのです。悪魔は人殺しで、悪魔には愛はありません。これに対し、神は真実をもって人を生かします。真理の教えはいのちの教えなのです。神の愛を知る者は、真実を語って人を生かします。

十番目の戒めは「あなたの隣人の妻を欲しがってはならない。あなたの隣人の家、畑、男奴隷、女奴隷、牛、ろば、すべてあなたの隣人のものを、欲しがってはならない。」です。人の欲望は際限ありません。「欲がはらむと罪を生み、罪が熟すると死を生みます。」(ヤコブ 1:15) 悪魔は、人の欲望をかき立て、罪を犯させて、殺しま

す。しかし、神は、人の物を欲しがらず、自分に与えられたもので満足するよう命じます。神がくださったものは充分であり、最善であり、最高なのです。神の愛を知る者は、神がくださったものに心から満足します。そして、自分に与えられた恵みに感謝しながら毎日常生活するのです。

以上が十戒です。神のみこころの全体です。神が人に求めておられる生き方の全貌です。これを抜きにして神と人を愛することはできません。神の愛を知り、神の愛に応じて生きる者は、神だけを神として生きます。神の御名をあげ、安息日を聖とし、父と母を敬います。殺さず、姦淫せず、盗まず、嘘をつかず、人のものを貪りません。そうして、神と人を愛して生きるよう努めるのです。